

City Life NEWS

全国で注目される施策や課題は、地域で暮らす私たちにどう影響するのか？身近に起きた出来事やトレンドなど、幅広い分野のニュースを紹介していきます。ネットでもさまざまなニュースを紹介しています。



シティライフNEWS
で検索

MONTHLY OF TOPICS

茨木商工会議所 独自のマッチングサイトで 事業承継を手助け

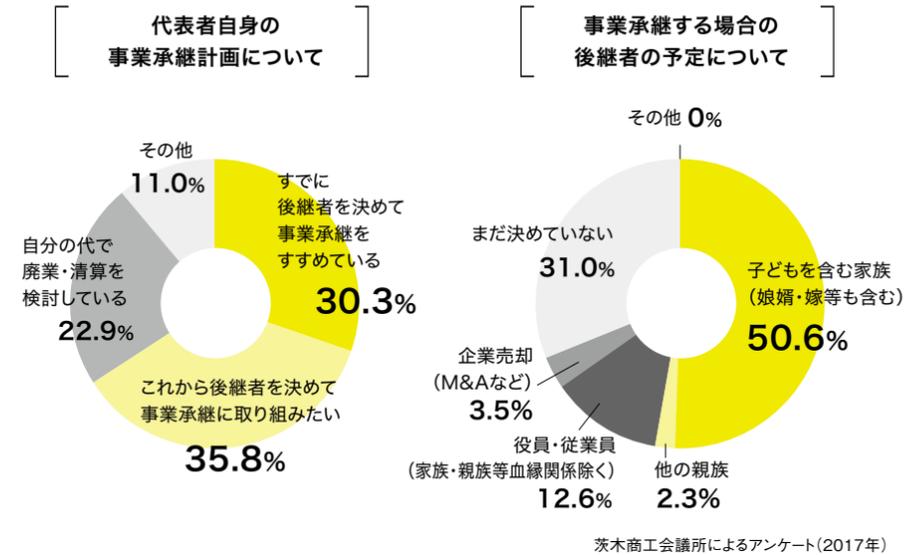
苦勞して育んだ事業をどう次世代に継承していくか——。地域に根付いた中小企業や個人事業主にとって、「事業承継」が大きな課題となっている。「後継者がいない」との理由で廃業に追い込まれる例も少なくない。国は2017年に「事業承継5カ年計画」を策定し、本格的な承継支援を始めたが、北摂地域でこの問題に力を入れてきたのが、茨木市の茨木商工会議所だ。今年5月には、事業を譲りたい人、受け継ぎたい人をつなぐ「茨木スモールM&Aマッチングサイト」を立ち上げた。

中小企業庁の資料によると、年間4万以上の企業が休業・解散しているが、以上約6割以上が黒字企業。一方で25年までに70歳を超える中小企業経営者245万人のうち127万人が後継者未定としており、後継者問題で好業績の企業であっても存続できなくなる現状がうかがえる。さらに承継には株をはじめ資産の引き継ぎや税制面などで複雑な課題が立ちあがる。

茨木商工会議所が2017年に実施したアンケート調査でも、事業承継計画についての回答109件のうち、「すでに後継者を決めて事業承継をすすめている」は30.3%にとどまり、「自分の代で廃業・清算を検討している」は22.9%あった。

同所は2009年にこの問題への取り組みを始めた。茨木市とも連携し、個別の相談に応じるほか、セミナーや座談会を開き、早期に承継を考える重要性を訴えてきた。その中で、家族経営の店を息子に引き継いだり、従業員に事業を継がせたりするなどの案件に携わってきた。親子の承継でも、金融機関が「融資は親個人へのもの」と難色を示すなど思わぬ問題も起きるといふ。

5月に立ち上げたサイトの「M&A」は合併と買収の略で、スモールがつくように小規模の事業を譲りたい人、譲り受けたい人を結びつけるサイトだ。サイト内にはそれぞれの人が相談を申し込む窓口がある。相談があれば専門家がアドバイスしながら



茨木商工会議所によるアンケート(2017年)

両者をつなぐ。同所の笹井直木理事によると、現在までのサイトからの相談は、譲り受けたい人が6件。小売店の事業を受け継ぎたい人や福祉事業を吸収合併したいなどの人たちが。一方、事業を譲りたい人の相談はまだない。笹井さんらは譲り受けたい人に対応する相手探しの検討を重ねている。

笹井さんは「脱サラで起業したい、副業で店などをもちたいという人は結構いると考えている。事業者の方はいつまでも元気だと思っているのかもしれないが、承継の必要に迫られてからでは遅すぎることが多い。承継は簡単ではない。なるべく早く考えてほしい」と話す。



茨木商工会議所理事の笹井直木さん

茨木商工会議所(072-622-6631)は来年2月2日午後2時から、立命館大学大阪いばらきキャンパス内の同所で、「事業承継セミナー&座談会」を開く。事業者対象。同所のホームページなどで申し込む。参加無料。

茨木スモールM&A
マッチングサイト



CULTURE ピークは2,250店舗 戦後発展してきた茨木の商店街

安威川が流れる肥沃な土地であり、交通の要でもある茨木市は、古代より人の営みが引き継がれてきた。西国街道が通り、江戸時代には参勤交代で諸大名が宿駅として利用。城下町として栄えた歴史も持つ。戦後、JR茨木駅と阪急茨木市駅が順に開通すると、地元や他県からも商売をする人たちが集まり、物流の拠点として発展してきた。市内12商店会・商店街が加盟する茨

木市商業団体連合会の山田久敬会長らと共に、かつての茨木駅前を振り返る。

国鉄(現・JR)茨木駅が1876(明治9)年に開通して以来、旧茨木村の町場は西に延び、1928(昭和3)年の阪急茨木町駅(現・茨木市駅)の開通は、東への展開を促した。現在の茨木駅西側のバスターミナル辺りは、新池という池だった。「当時は茨木小学校へ通っていて、新池にはよく魚釣りに行っていましたね」と山田さんは懐かしむ。戦後、市の小売商業は1960(昭和35)年頃まで阪急茨木市駅から市役所に至る中心市街地を市最大の小売商業地区として発展。周

辺は商店街、小規模商店郡、分散的に立地した小売市場などからなり、商店数は約700店舗となった。空地や田んぼが多かったという阪急駅前も徐々に景色を変えてゆく。その後も急速な人口増加により、1970(昭和45)年には倍以上となる約1,500店舗にまで達した。

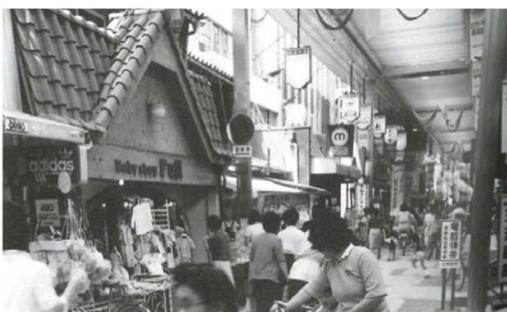
最も商店街に活気があった頃、大阪市内から北摂を通過して丹波の亀岡に至る亀岡街道からやってきた人々の乗るバスが、茨木阪急本通商店街を通過していた。大渋滞でバスが動かず、窓から手を伸ばし買い求める客のために、近くの商店が道沿いに商品を並べて売っていたとか。

1970年大阪万博に合わせて国鉄茨木駅、阪急茨木市駅の高架や駅前再開発事業によるビル建設などが進んだ。万博開催期間中は、宿泊する来場者たちでごったがえした。当時幼かった同会事務局員の横山繁美さんは「普通の平日なのに、人が多すぎて迷子になりそうなくらい。親戚の大人に『手、しっかり持っときや』と言われるほどでした」と話す。

1970年代以降も商店数の増加は続き、1982(昭和57)年はピークとなる2,250店舗にまで伸びた。



茨木市商業団体連合会会長の山田久敬さん



阪急本通商店街では、亀岡街道から来るバス客が商品を買求めた。写真上は昭和55年、カラータイル舗装となった記念のパレード(いずれも茨木市提供)



(上)心斎橋筋東から西を望む。車がぎりぎり行き交えるほどの道幅だった高橋筋(中央通り)は、昭和43~45年にかけて拡張された。(左)昭和53年、茨木フェスティバルのパレード。(上・茨木高校、左・茨木市提供)



寺町橋筋(東西通り)の様子。写真左の瓦屋根の建物は、川端康成ゆかりの書店「堀屋旭堂」。(昭和50年撮影、茨木高校提供)